

木津川きは〔一名泉川いづみがはといふ。河海抄かかいせう曰、泉川いづみかはといふは木津川きはをいふなり、八雲御抄やくもみせうには、柞は、その杜もりのもとなりとぞ。又瓶みかの

原はらの郷がう、中井平尾村ちゆうみひらをに川あり、水上わづかは和束わづかより流て、末は木津川に落る、これを泉川ともいふとぞ。古来より両義決せず。木津川の水源は伊州山田郡阿知いしゆうといふ所より出、伊賀半国いはんこくの水此川に流れ、末は淀川よどがはに落る、霖雨にあらざ、晴天の日にても東風つよく吹くときは満水して堤に溢る、白砂常に流れて川の面は白布を敷たる如くなり〕

玉 葉 月影も夏のよわたる泉河川風涼し水のしら浪 俊 成 女

新 千 泉河遠いづみがはきわたりの月影に声をつくして鳴子規 後 宇 多 院

新 続 古 かさねては衣手寒しいづみ川千鳥鳴夜のあかつきの霜 野 宮 左 大 臣